

公立の中学校へ、私服で通学しようとする生徒をめぐって、小さな事件が報道されたことがあった。確か、制服着用を入学時に条件化している私学とは異なり

「校服」は、着用が望ましいという程度の規制力しか持たず、従って、その生徒は、校則違反というほどのことではなく、精々、「みんなとちがって目立つ」という程度の逸脱に過ぎなかったようだ。にもかかわらず、学校側の妨害(?)は、目に余るものがあったらしい。脅迫に近いほどの強い注意をくり返す教師陣に加えて、父兄たちまで「私服反対」を決議したという。

この事件は、単なる制服の可否を超えて、わが国の教育界の体質を、よくも悪くも鮮やかに露呈している。「みんなが同じ」であることを、教育効果と考える傾向、「決められたことは絶対に守るべきだ」とする形式的真面目主義、そし

て、何よりも、子どもたち一人一人の多様なあり方を、「当たり前のこととして」自然に受けとめることの極端に下手な大人たちの特性であろう。

それぞれが、それぞれらしくあることが当然であるなら、「逸脱行為」などというものはそれほど多発しない筈なのだが、みんなが一斉に同じであることが期待されるから、その人がその人として行為するとき、それは「逸脱」と指導される。私服をめぐるあのトラブルは、こうしたありようの、見える形の現われであったのだ。

『人と人の間』という、木村敏氏の名著がある。日本人は「私という」自我を中心とせず、むしろ「間」を中心に置くという。これは、日本人の存在様式が優れて「関係的」であるという指摘なのだが最近の大人と子ども関係の硬化化は、一体、何を物語っているのだろうか。(H)

## 幼児の教育 第八十三巻 第十号

十月号 ◎

定価三〇〇円

昭和五十九年 九月二十五日 印刷

昭和五十九年 十月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 編行人 本 田 和 子

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします